

# 炭焼きの 与助

【その四】

作：近藤せいけん



## 炭焼き 与助 その四

煤ヶ谷村（すすがやむら）に戻った。与助は毎日懸命に働いた。

今は、家族が出来たような幸せ感にしていた。

「どうにかして、良吉の家族を守らなくては。食べていけるようにしなくては」と、炭焼き、畑仕事、にわ鳥、牛、馬の世話をしながら考えていた。ふと、おもいついた。

「そうだ、お寺の和尚さまに相談してみよう。それが、いい～」  
急いで、お寺の和尚さまの所に、出向いた。

「和尚さま。聞いて下さい」とこれまでの、貧乏長屋での事を話した。  
和尚さまは目を閉じて、静かに、与助の話を聞いていた。

「何とか、貧乏長屋の良吉の家族、長屋の衆のためになりたい」  
「でも、どうして良いか、解からない。和尚さま。教えてください。」「何か、良吉の家族が食べていけるように、長屋の衆が少しでも、豊かになりますように・・・いい方法を教えてください」

和尚さまはおもむろに、目を開いた。

「与助。おまえのその心、とても大事じゃ。よくぞ、そこまで、人を思いやる気持ち育てた。良きかな。誉めてとらす。」

「和尚も力になろう」

「ところで聞くが、貧乏長屋の前には、綺麗な湧き水があると、ゆったな」

「はい、とても綺麗な湧き水であります」

「そうか、その湧き水こそ、天の恵みじゃ」

「その清らかな、天の恵みを使わせていただくのじゃ」

「はい、和尚さま・・・」

「この煤ヶ谷村（すすがやむら）から、厚木村にかけて、豊かな、「大豆」が沢山収穫できる、産地じゃ」

「この大豆を使って、「豆腐」を作るのじゃ。製法は、この和尚が教える」

「豆腐作りには、綺麗な水が沢山必要じゃ。貧乏長屋の前の綺麗な湧き水を使うのじゃ」

「豆腐作りは無駄がない、残りかすは、「おから」となり、栄養分にすぐれている食べ物になる」

「豆腐を作り、おからをつくり、町衆に買ってもらうのじゃ。さすれば、貧乏長屋の衆の内職になり、日銭がかせげる」

「長屋の衆が協力して、いいものを作れば、やがて評判となり、生計がたつ日が来るであろう」

「そのためには、みな衆の一致した団結、和が必要じゃがなあ」

「おまえに、それを先導する、燃える情熱があるか・・・」

「成功するまで長い道のり、忍耐がためされるぞ。おまえに出来るか」

与助は即座に、答えた。

「やります。必ず。貧乏長屋の衆を説得して、おかみさんたちの力と、子供たちとで「おいしい豆腐、おから」を作ります」

「大豆を買い付ければ、周りの村人のためになり、そしておいしい豆腐、おからを売れば、町衆のためになります」

「やります。みんなに話して、手助けしてもらいます」

与助はいつものように、厚木宿に炭、まき、たまご、野菜、を持って売りにゆき、帰りに貧乏長屋に直行した。

貧乏長屋に着くと、まず、お仲さんの家にゆき、おいしい豆腐、おからを作り、販売する計画を打ち明けた。良吉、きくはじっと聞いていた。

「与助さん、大変良い計画だと思います。長屋の衆には仕事がなく、とりわけ、おなごの衆には、働く場所もなく、困っていました」

「ぜひ、成功させて下さい。この幼い子らのためにも」

「そう、そう、長屋の皆の衆に話す前に、大家さんの初吉さんに相談を持ちかけてから、されたらいいと思いますよ」

「そうですね、大家さんに最初、話すほうがいいですね」

「善は、急げだ。今すぐに行こう。良吉、初吉さんの家に案内しておくれ」

「ううん、いいよ、行こう。行こう。」

「きくも、一緒に行く」

大家さんの初吉は、与助の話をいちいち、うなずきながら聞いていた。

「そうか、いい話だ。とてもいい。よお～し、その話、乗ろう。面白いわ。わははは」

「与助さんの話は、長屋の衆から聞いていた。なかなか出来るものじゃない感心していた」

「金は出せないが、貸家を一戸貸そう。工場に使えばいい」

「ありがとうございます。材料は、私のほうで揃えます」

「長屋の衆には、私のほうからも、話しておこう」

「お頼みいたします。私のほうからも、一家、一家、回って、協力をお願いにあがります」

「頼むよ。長屋の衆のために、人助けじゃよ。しょせん、人間、一人では生きられない。みんなで助けあってゆくのが、天の道じゃよ」

「本当ですね。そうありがたいと思います」

「さあ、良吉、きくちゃん、行こうか。次は大工の富めさんの家に、行こう。」

「富めさんはけがして、寝ているよ」

「そうか、それでも、話だけでも、聞いてもらおう」

漁師の貝さん、棒振りの金次、左官職人の馬吉と順次回って、熱く話した。みんなのり気であった。

漁師の貝さんは、特に熱心で、豆腐作りに必要な海水の運搬を心よく引き受けた。

与助はやる気まんまんであった。

厚木宿に炭、まき、卵、野菜を届ける日以外は、お寺の和尚さまの所に出向いて、豆腐作りの製法を学び。身につけるために日夜、研究に没頭した。

「いい、おいしい豆腐。おからをつくるぞー」

「貧乏長屋のみんなの力を集めて、相模一の豆腐を。つくるぞー」

一生懸命、作っては壊しを繰り返し、創意工夫に明け暮れていた。

